

---

# 俺ら

トコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺ら

### 【著者名】

トコ

N4597Y

### 【あらすじ】

ちょっととした事情で屋上にたまっていたオレらの前に人が落ちてきた。「は？異世界トリップ？？式？？？」よくわからねえが、退屈からは抜け出せそうだよ。

## 俺らと異世界人

あいつとてそこまではするまい、と考えながらも容疑者はあいつしか考えられなかつた。俺は階段をひとつ飛ばしで駆け上がりたくなる衝動を抑えながら登りきり、屋上の鍵を開ける。

扉を開けると春の柔らかな光が差した。うす雲の掛かった空に仄かに桜が香つている。

「よお」

「あつ、御鏡先輩」

先に来ていた二人が振り返る。俺もまた、いつものように声を掛けた。

「ごきげんよう」

\* \* \*

俺は、御鏡葉月。中三で14歳女性だ。声に出すときの一人称は“私”だが、考へている時や素では“俺”になる。俺は今、ある事情により多くの人間を騙しながら性格をしており、その弊害で学校では普通に話す人間、つまりは友達というものだが、友達を作ることができない。

ではこの人たちは何だつて？

目の前の二人を見る。いそいそと俺用のクッショントリックを持ってくる綾に、ニヤニヤ笑いながら話しかけてくる柚羅。

「なあ、この学校で怪奇現象が起きたって話聞いたか？？」

「いやー！止めてください！」

怖がりの綾が丸くなつて耳を塞ぐのが面白いのだろう、柚羅はよくこういった話題を振る。

しかし今回ばかりは俺も仲裁に入るつもりがない。柚羅の話に乗る。後ろで綾が恨み言を呟いた。

「その件について理事長直々に注意されたよ。性質の悪い悪戯をするようなら屋上を閉めることもできるそつだ」

「はあ！？ オレらのせいかよ！？ 誰がソファーなんか落とすかつてんの。大体壊れたの校門だろ？ あそこまで『届くはずねえから騒がれてんだろう？？ 校庭越えんだぜ？』

「何か対応をとらなければいいわけも通じないでしょ？？ おそらくは・・・人身共犠でしうけど。本来立ち入り禁止のはずの屋上に一部の生徒が入り込んでいるようでは、学校側の管理責任が問われる必至。けれどもっと大きなこと、落ちるはずのない場所に落ちてきた家具とかね？ そいつた事に対する不安の解消にはなるから」

「うわ汚ね～！・・・待てよ、そんなら学校側は怪奇現象の正体が分かつてんのか？」

「さあ。分かつていいならそんな回りくどいことをしないのではないかとは思つけれど、はつきりとしたことは言えないと。何かを隠したいのなら噂を利用すればいいだけですからね」

つまり、ホンモノの怪奇現象ではないかといつこと。 全く何故そんなものに俺達の場所を取り上げられなければならないのだろう。

「おっさんイイ性格してやがんなあ。どう転んでも損しねえじゃん。あ～・・・つつてもやるつきやねえか。おい、綾！ 綾！ ！耳塞ぐなぞてかぼちゃー！ ！ ！」

「いや～！ ！ そんな話聞きたくないですー！ ！ ！ ！ 意地悪馬鹿最後はもうワケが分からぬ。しかし思い思ひに話す声はにぎやかで、楽しい。それは学校ではなくある光景。

しかしこの“屋上”は、学校ではない。

「一応聞いて、綾。ここに鍵を取り上げられるかもしないから

「え？ なんですか？？」

「オレ達を怪談の犯人だと思つてんだろ？ ……つか、ホントお前知らねえの？ すげえ噂じやん」

柚羅が呆れたように言つと、綾は胸を張つて応えた。

「そんなのつ！ 怖い雰囲気になつたら耳を塞いだに決まつてるじゃないですか！」

「阿呆かつ！？ だからその怪談つてのが……」

「きやー！ やだヤダ柚羅さんの意地悪ー！ ……！」

「だから知らなきや話がすすまねえだろ。ほれほれ教えてください柚羅様とか言えよ。知らねえのお前だけだぞ」

「いーやーでーすー！ ……！」

くすっ

笑つてしまつた。漫才をしている場合ではないと知りつつも、今幸せに身を委ねてしまいたくなる。

「綾、頼みたいことがあるのだけれど」

さりとて思いに流されるわけにもいかない。綾を説得することにした。

「なんですか？ 御鏡先輩の役に立つことがあるなら不肖この鎌綾乃喰え火の中水の中つ」

「敷地内で不審な落下物が確認される事例が多発している。調べてみてくれないかな？」

「そんなの柚羅さんがやつてるんじゃないですか？ 屋上にいるのが暇で物投げたとか・・・ つてもしかしてそれが幽霊の仕業ですか！？」

ようやく話された内容が怪奇現象だと分かつたらしい。顔色が変わった。

「気付くの遅せーよ」

「ううう・・・ 馬鹿な悪戯してる柚羅さんなんかに言われたくないです！ もうやと止めてくださいよめーわくです」

柚羅のもつともなシジ ロミをものとせず、言い募る。完全に犯

人扱いだ。

「だからオレじゃねえって……」

「たとえ柚羅が犯人だとしても、私たち以外の誰かを犯人として捕まえなければ屋上の鍵は没収なの。頑張って探ししましょう」

柚羅の発言をさらりと無視して綾の手をとる。綾の顔が真っ赤になつた。

「はいっ！…頑張りましょー！…」

張り切つて声を上げる綾を尻目に柚羅が囁いた。

「誑しめ」

「“やるつきやねえ”と言つたのはどちら様でしょうね。それとも

“俺ら”に綾は入つていないとでも言つつもり？」

「褒めてんだよ。大したお手並みだ。」

テキトーに頑張りうぜ

「…・そうだね、適当に頑張りましょー」

からかい混じりに窘められ、余裕がなくなつていていたことに気付く。悪い噂が目立つ柚羅だが、決して馬鹿ではない事が時折見せる鋭い言葉に表れる。屋上登校なんて勿体無い。

「コードネームは『怪奇・空から降つてくる椅子』な

「はー?」

「ださつ！…」

「ださいつつたのはこの口か?」

本音がこぼれた口が引っ張られ、大きくなる。綾もなんと叫つべきか・・・雉も鳴かずば撃たれまいに。

「ほんひょのほほへふー」

「綾もこいつ言つてることだし、本決まりで。」

「・・・仕事名などいらないと思わない？」

俺もやんわりと反対するが、これが逆効果だつた。

「よーしそんじやあ今からコードネーム『怪奇・空から降つてくる椅子』開始だあ！…」

大声で宣言する。じつやう本決まりになつてしまつたらしい。

かくして俺らによる『怪奇・空から降つてくる椅子』原因追求が始

まつた。

\* \* \*

えーん。お化けとか、幽霊とか、怪奇現象つて駄目なのに～。てゆーか柚羅さんの差し金じゃないんですか！？

とか考えながら噂を集める私つてちよつと健気ですか？なーんて。柚羅さんも、御鏡先輩も学校の中じゃ表立つた動きができないってボイの自然にこつなるんですけどね。

ええと。自己紹介がまだでしたっけ？私は鎌綾乃、14歳の力ガ中2年生です。現在憧れの御鏡先輩の追っかけから友達に昇格しました！！（多分）柚羅さんより下つぽいのが気になりますけど、これが上手くいけば親友に昇格かもなのです。がんばるぞー！

といふことで。学校で一番仲がいい、そして私に怖い話をしようとした由宇崎さんに話を聞くために声を掛け……ようと思つんですけど、やっぱり怖いです。

ガタガタしていると、拳動不審な私に気付いたのか由宇崎さんが声を掛けてくれました。私は後に引けない思いで切り出します。

「ゆ・・・ゆう由宇崎さんっ、さつきのおはお話つ・・・きかせて・・・・・・」

「あれ？綾乃ちゃん、どうしたの？さつきはあんなに怖がつてたのに。まあ面白くていいけど

面白いつて・・・つ！

いつも本氣で怖いつてここの言い方。言葉を飾らないのが由宇崎さんのいい所だけど、こんな時はちょっとぴり凹みます。

「あははっ。やっぱ綾乃ちゃん面白いわ。で、なんなの？麗しの御鏡先輩にでも頼まれた？」

なんで分かるんだろう？と田舎者めがけてこぶし、また笑

つてバシバシ肩を叩いてきた。

「うはは分かりまくりつ。どうせなら同じ御鏡でも紫苑先輩に目をつければいいのに、物好きだねえ。紫苑先輩は優しくて御鏡家の跡継ぎで一番重要なことに、男なのに。同じ御鏡家でも葉月先輩、じゃ玉の輿とは行かないモンね~」

「玉の輿つてありえないですよ会つたこともないのに。ほんと学  
校に来ていなし、来てても黒山の中心ですもん。あの山の中に入  
つてくことを考えたら玉の輿なんてのしつけて送り返します」

あ。ここ過ぎがつた。

由宇崎さんは一言も言わないけど、なんとなく分かる。彼女は紫苑先輩が好きなんです。それで紫苑先輩とそつくりらしい、従姉弟の御鏡先輩に対してはちょっとキツいんですね。だからどうして私が御鏡先輩の追っかけをしてるのか解らなくて、でもライバルにならなくて良かつたって気持ちもちょっとあるみたいで。これで私が紫苑先輩をフォローするとそれはそれで不安そうにするので、手段は軽く流してるのに、今回は失敗しました。恋する女の子って不思議です。

「はあひひひつ！…」

「そうだ、元々その話を聞くために曲宇崎さんに話しあげたんだつ

「…」  
「…」  
「…」

誤解を招くような言い方は止めてくださいとか葉月先輩なんて馴れ馴れしいですよとか言いたいコトはたくさんあるんですけど、目の前に迫つた恐怖に言葉が出ない私を許してください。

六  
六  
六

「い、いじやないはずですよね・・・」

半泣きになりながら由宇崎さんに噂を教えてもらつて、変な物が落ちたという場所に行く途中の私。ちなみに一人。

由宇崎さんは、散々色んな噂を聞かせて怖がらせた後“じゃあ御鏡先輩のためにがんばんなよ”とか言って付いてくれませんでした。半ば当てにしていただけに怖さも倍増です。

「うう・・・御鏡先輩のためだもん」

最強の呪文を唱えても、ここから立ち去らないでいるくらいの勇気しか出てこなく・・・

なにが落ちたらこんな穴が開くんですかあ！！

ガタガタ震えながら考えるのが精一杯です。

焦げたような穴と、明らかに血みたいな匂いの残る染みを見てどうしようつて言うんですか。うわーん。

そういうえばさつき地響きっぽい音がしたんですよねえ。ふふふ・

・ってことはでこれつて出来立てほやほやの怪奇現象？私発見者一吼さんですか？？

いやつ。そそんなのやですっ！！

最強の呪文の効果は化け物より弱いみたいで。とりあえず誰かを呼びに行こうと後ろを振り向こうとした私の目の端に何かが映つて

\* \* \*

オレヒトモ、ぶつちやけ引き籠もり？みてえな。半分以上屋上登校だからな。

その屋上登校も一年半以上続ければ、それなりに人脈つてモノが

出来上がる。各学年で担任となつて苦労した奴ら、補習を認めさせるために賭け事をした奴・認めさせた奴、人生相談を申し出た奴つ

てな。プラス近所の食事処なんて、結構楽しくやつてゐる。

ああ、自己紹介が遅れたか。オレは神羅柚子。」の春中三になつた受験生つてトロロか。ま、伊達にこんなトロにいるわけじやねえし、勉強の方は問題ねえんだけど。こんなトロにいるんで内申はボロボロなんだよなあ。

今日も知り合いのセンゴーんと「行つたら様子が変ですよ? 聞き出してみりやあ面白いことになつてるじやねえの。暇だし現場廻りでもしよつかな」なんて考えてたら、俺のせい?みてえな。

まあ、葉月が余裕そうだつたんでホントに疑われるわけじやねえんだろうけど。確かに考えてみりやあ日頃から屋上に入り浸つてるオレが一番怪しい。

てなわけで、落ちた物や場所なんか

始めて聞いた時と同じセリフ。正門にカウチだろ、その時点で無理だ。けど他にも落ちてて、それが校外だつたりもするんだ。動物が死んでることもあって、それもすごい高さから落ちてぺっしゃんこになつているとかさ。信憑性のあるものだけでも犬に魚に馬。・・つーか馬なんてどつから持つてくるんだよ。

まあなあ～、とりあえずモノホンの怪奇現象ってヤツである」とはわかる。んで、重い物ほど校舎の付近に落ちてる。確かにオレを疑いたくもなるだろ？

けどな。

オレは一番近くに落ちたと思われる石像の付近の柵を見る。屋上には普段から鍵が掛かっていて、オレ達のように鍵を持つていなければ入ることはできねえんだが、それでも俺の背より高いフェンスが屋上を囲んでいた。そいつはゆうに2メートル以上あり、高速に自転車を落とすなんてレベルじゃねえ。馬や石像を落とすなんてコトができるはずもなく、そもそもんなモノどこから調達してくるんだ

つて話がひとつ。

重さと落ちている距離に相関関係が見られるのは確かだが、重さと重力を考慮すりやあ屋上から落としたんじゃ高さが足りな過ぎるのが丸わかりつてのがひとつ。これは理科の高峰も言っていたから確実だ。まあ、常識で考えて自転車置き場向こうのプールサイドにベッドを落とすにや四階分の高さじゃ足りんだ。

そしてまあ、最後に。

オレははしごを上り、貯水タンクに引っかかつていた布キレを掴む。先ほど石像落下地点を見たときに気付いたのだ。

そこはオレ達もあまり気付かない場所だが、いくらなんでもこんなものがひらひらしていいやあ一両日中には気付く。昨日葉月と点検したときには確かに無かつたんだ。

しつかし、屋上より上からモノが降つてるつて解った所でだからどうした?なんだけどな。これから落ちてくることを止めなきゃオレ達の肩身は狭いばっかりだ。

はあー

大きくため息を吐いて空を睨む。

「

どおおおおん

空気が震えた。特撮の特殊効果みてえな炎が天空に見える。そして、炎の中から何がが落ちた。それは学校の敷地ギリギリつて所へ落ちてゆく。オレはそこへ向かおうとして・・・

「わあっ

「柚羅!/?今のは・・・」

ダンツ

最後の物音は背後で聞こえて、葉月と顔と見合せぬ。

「人が」

「降ってきた!?!」

その驚きはオレからもうひとつ落し物を忘れさせるには十分なインパクトを持っていた。オレ達は落ちてきた人間のそばに駆け寄

る。

男からは異臭がした。血と髪の焦げるにおいが混じってるんだろう。服は血で汚れているし、どうから落ちてきたのか知んねえケドコンクリートの床に叩きつけられたんだ、医者が必要だろう。とりあえず保健室か？ こいつを運ぶのは面倒そつだし、呼んでくればいいか。

「待つて。馬鹿なことをしないで」

再び階段へ向かつた俺を葉月が止める。

「関係者以外立ち入り禁止、どこの学校にもある注意書きよ。こんな不審人物を連れ込んでいたとでも言つつもり？」

「でも！ 怪我してるだろ！？」

「どうせそんな男はいなかつたことになる。なら、わざわざ学校側に知らせる必要はないでしょ。薬を借りてくるわ」

関係者かどうかなんてわかんねえって。というオレの突っ込みを無視して葉月は階段を下りてゆく。オレはひとつ息を吐くと今までのように気にしないことに決めた。

\* \* \*

叔父には気付かれたくない。保健室へ向かいながら考えるのはただそれだけだった。

現在、叔父とは一蓮托生になっているが、俺が紫苑を演じて周りを誤魔化せていくということは叔父にとって脅威のはず。紫苑が目覚めれば俺の身は以前にまして危険になることが予想される。それまでに弱みを握つておきたい。

嫌な人間だな、俺も。

それでもいつ起きるかわからない紫苑が起きた後のことを考えなければならぬのだ。自分と大切な人を守るために。保健室は取り込み中だった。

「失礼しま・・・お取り込み中のようですね」

鍵もかけずに戯れている人影を見て脳にメモする。“英語の米田と保健の野堺は恋仲”

「やつ・・・別にそういうわけじゃあーー！」

「そうよ。何か用かしら？」

逆の答えが全く同時に返り、一人が顔を見合わせる。

「なななんてコトを・・・」

抗議する野堺の顔は真っ赤。俺は脳のメモを訂正した。“おそらくは火遊び”

「私のことはどうぞお気になさらないで下さい。怪我人が出たので消毒液等借りますね」

「もしかして鎌さんかい？ 行こつか？」

「いえ。それには及びません。本人が自分でできると言っていますから。それでは失礼します」

扉を閉めたとたんに背後で「ぜぜ絶対誤解されましたよーーーー」と声がした。わざわざドアを閉めた後に声を出すなら音量を考えろと言いたい。これでは誤解しようにも誤解できないだろつ。

とにかく、首尾よく薬品を手に入れた俺は屋上へ戻る。

「これ、ほとんど返り血だぜ」

脱脂綿に消毒液を浸しながら感心したように声を上げる柚羅。俺は柚羅の手際のよさに呆れた。一体どんな生活をしたらこれほど手際よく治療ができるようになるのだろう。

「うーん。こりゃあほとんど無傷だぜ。髪の一部と足をちびつと火傷して腕に小さな切り傷があるだけ。派手な音した割にたんごぶもそんなでもねえし」

「奇妙ですね。空から落ちたらたんごぶでは済まないのではないでしょつか？」

「まず無理だな。その辺は起きたら聞くことじょうぜまあ、それが妥当だろつ。

「・・・何してんだ？」

「一応、危険人物だと困るでしょ?」

保健室から着服してきた包帯で男を縛る俺に、柚羅が問いかける。  
・・・しかし、包帯というのは伸びてしまふので縛るには向かない  
な。などと考えながら所持している刃物を没収する。大小合わせて  
片手に満ちるほどの刃物を所持しているなんて危険この上ない。何  
も聞かずしてしまいたいほどだ。

しばらくしても男は目を覚まさなかつた。段々下校時刻が迫つて  
くるが、ここへ置いて帰るのでは不安だ。下校時刻までにこの人間  
をどうにかしなくてはならない。少しずつ俺達があせり始めたとき。  
「みみみみ御鏡せんぱーい!もうヤダ帰りましょ?よーーーーーーー  
べちゃ

丁度茶を飲んでいた俺は綾の突進を避ける。男に足をとられた綾  
が無様な音を立てて転んだ。

「うう・・・誰ですかこんなトコに・・・人?誰ですか??

警戒心を顕に俺の背後に隠れる。忙しい奴だ。

「この人・・・なんか嫌です。御鏡先輩の彼氏じゃないですよね?  
「はあ!?!?」からそんな発想が出るのかしら??

驚いて口調がおかしくなる。突然何を言い出すんだろう。

「ですよねこんな気味悪い人。じゃあ、さつさと追い出しましょ?  
「をい」

柚羅が突っ込んだ。“葉月”としてはノリ良くなつて突っ込んだりは  
できないので、柚羅の反応は心地いい。

「勝手に決めんなアホ。よくわかんねえケド、一応怪我人だぞ」「  
でも・・・」

「リチャード!?!?

がばりと男が跳ね起きた。綾の一撃が効いたのだから、腕につ  
つすら痣が見える。

「喧嘩する必要はなくなつたよつですね。こんにちば、私は御鏡葉  
月と申します」

「そんなことよつリチャードを見なかつたか!/?俺と同じよつに落

ちてきたはずだ

「ここには貴方だけですが」

わざと含みを持たせて言ひ。・・・」それで勝手に勘違いしてくれればしめたものなのだが、そう上手くはいかないかな。

そういうえば、この男が落ちてきたと思われる振動の直前にもすごい音がした。おそらくアレだろう。

しかし、屋上に落ちていなかつたといふことは亡くなつてゐる可能性のほうがはるかに高い。何やら事情がありそうだが、どうにか面倒にならずに話を聞き出せないだらうか。

「ならどこに・・・」

「知りませんよ。大方どつかに落ちてるんじゃないですか」

俺の思惑をあつさり無駄にした。綾にとつては興味より煩わしさが先にたつらしい。・・・せっかくの情報源が

「そうか。・・・失礼した」

「ちょ・・・」

ストップをかける暇も無く、男は颯爽と屋上を出て行つた。・・・話を聞く暇もあつたものじゃない。

「名前も拝聴してないのですが」

俺の咳きも空しく下校時刻になつても男は帰つてくる様子を見せず、俺達は本日一日の苦労を思いながら帰途に着いた。

一夜明けて。オレがいつものように屋上登校すると、昨日見た男がいた。

「よう。知り合いは・・・見つかんなかつたみてえだな

纏つているオーラが明らかにそうだもんなあ。

「必ず・・・遺志を・・・」

\* \* \*

独り言とか呟いたやつてるし。あー・・・つか、そいやー。

「お前どうやって入ってきたんだ?」

鍵が掛かっているはずの屋上を思い出す。空から落ちてきたこと

といい、不審とか言つてベルを超えてるだろ。

「ひとつ訊いてもよいか・・・? ここは樂園だら?」

「あ・・・いや」

樂園ってどつかのパブ? なんて冗談を言える雰囲気じゃねえ。しつかしどう考へても樂園なんてモノに心当たりはない。

「星を訊いているなら地球で、国名は日本。臥丘って地名だ。あんたが何を指して樂園と言つてんのわかんねえよ。なんで落ちてきたのかもな」

「共栄の者だ。ここの世界は樂園か?」

「・・・・・・」

「違うのか?」

いや、世界とか言われましても。

オレの沈黙を否定と取ったのか、男が聞き返していく。・・・今はじめて知ったんだけどよ、神様つて奴は“光よあれ”って言った瞬間に闇を作り出したんだな。オレ達は、相対的にしか物事が見れないのかもしんねえ。

「ここの世界にどんな名前が付いてるのかなんてオレは知らねえ。他の世界なんてモノが認識されていねえから、ここの世界に名前をつけて区別する必要がねえんだよ。つーとあんたは、他の世界から来たとか言うんだな?」

それなら空から落ちてきた事だつて納得ですよ。 あー、つ

うか、全てが常識やら理解の範疇から外れていることに納得? ここのままじや本当に屋上閉鎖だな・・・

「ここが樂園ならな。・・・状況を見る限りでは当たりだろ? が、本当にこれで・・・トワイカラー」

「ん・・・?」

奇妙な気分がして目を瞬ぐ。俺の目の前で雲が発生した。

「やはりそうか？・・・ああ。疲れているのかもしれない・・・だが、伝説は間違っていたようだな。こんな事でリチャードを失うなんて・・・」

「あー・・・見つかったけど、亡くなつたのか。そりやあ落ち込むわ。

にしても、雲としゃべる人間。自称異世界人なんで変なのが当然かもしんねえが、こりやあどうみても通報モンだよな。

オレの目線に気付いたらしい。男が言つた。

「俺は式使なんだ、気にしないでくれ」

「式使？その雲が？」

「雲？ そんなもの・・・トワイカラーが見えるのか！？それではあの式は・・・・・はあ！？・・・確かに、しかしそれは修行を経てだ。こんな所では・・・なるほど」

いや。だからオレ置いてけぼりなんスけど。雲の言つてることも聞こえないし。独り言はちいせえ声で言え！－

「・・・それしかない、か」

だから何が。

もう突つ込む気力も起きず、心の中でのみ一人ごちる。だつて話振つといて丸無視なんだぞ。こっちの訊いてることには答えねえしぁぐれるだろ？

「柚羅、昨日の話だけれど・・・」

扉を開けて入ってきた一人が固まる。オレの方もこんな朝っぱらから二人が来ると思つていなかつたので驚いた。

「あー！ 昨日の人！ なんでまた居るんですか？ やつぱり柚羅さんが連れ込・・・」

「人聞きの悪いコト言うな！－しょもねえ噂に乗せられやがつて。こいつは異世界から来た人間なんだよ」

「本氣ですか？ ばつかみたい」

・・・確かに突然こいつは異世界から来た人間だとか言われりやあ信じる人間は少ねえだろうけど。綾に馬鹿にされると妙にムカつ

く。

しかし、考えてみると綾はこの男が空から落ちてきたことすら知らないわけで。勝手に屋上に居る（多分オレが引き入れたと誤解されている）人間だとしか……つわあオレ立場ねえなあ。

とりあえず綾に事の次第を説明しようとすると、突如綾が悲鳴を上げた。

「え？え？嫌あ！！みみみ御鏡先輩つ助けて下さいお化けがー！！！」

一日散に葉月の背中（定位置）に行くと、いつもの如く丸くなつて震えだした。

「きやーーーしゃべるなバカバカ！神様～悪魔が居ます助けて下さいーーー」

「こりつ、大人気ないぞ。彼女は何も知らないだから多めに見てやつてくれ。・・・そう、俺よりはるかに大人なのだろう？」

「来ないで・・・来ないで下さい！そんなの見えない。居ないんだからーーー！」

雲がゆらりと揺れ、綾へ近付く。あー・・・じにいつのことね。確かに幽霊に見えなくもねえかな。

「おい、綾。あれは式使つづーらしいぜ」

「あれ・・・？綾も柚羅も何を言つていてるの？」

綾がお化けとか悪魔と呼んでいるものが何か気付いたオレはいつも調子を取り戻すが、葉月は不思議顔だ。

「だからさ、あの雲だよ」

「あつあのチマチョゴリの女の子です」

「だからどこに？」

「？」

俺達は顔を見合させ・・・

「「どういこと（だ）ー？男ーーー」

「お化けーーー？」

一人阿呆なコト言つたが無視。さらにオレと葉月は唱和する。

「「後説明の前に名乗れ（立場をつかがいたい）」」

「・・・相模だ。相模宗谷」

質問と答えが同時に発せられた。男の方も男女と連呼されるのは嫌だつたらしい。

「式は式使にしか見えない。式を見ることができ、式と契約できるものが式使だ。通常は何年も修行して式を見えるよつにするのだ。見え方に差があつて当然だつ」

いや、だらうとか言われてもな？お前のトロジヤ普通かもしんねえケドこつちじやンなこといやあ頭に花が咲いてると思われるぜ？「式には何か利点がある？ただ幽霊が見えるだけなの？」

あら？葉月が食いついた。こいつ空想小説馬鹿にしてなかつたか？一時期陰陽師とか流行つた時にその話をしたら心底びづきもよさそうに流してた癖に。

「いいや。もちろん能力があるが・・・何故そんなことを？君たちには見えているのだろ？」「ここは楽園なのだろ？」「

「そこ」が問題なんだよ。相模の言つ樂園つつーモンとオレ達の世界にはでつける隔たりがあるように思えんだよな。あなたは“樂園”をどんな所だと思つてきたんだ？」

「最強の式使になれるところだと聞いていた。実際は違うようだが・・・」

「そうでなければ、誰があんなむざむざとつ・・・！」

「そんなのどうでもいいんです！早くトワイカラーを連れて出てつてください！私は何もできない人間でいいんですから！…」

錯乱状態で綾が叫ぶ。

「ゴーレイの手ほどきなんてやだあ〜・・・『さやー近寄らないで触らないで下さい死ぬ〜！…』

むちやくちや楽しそう。・・・いいなあ。

雲と戯れている綾を見てひとつ息を吐く。綾が本気で嫌がつてるのは分かるんだが、真面目な話をしてるのに緊張感にかけるんだよなあ。この叫び声。

「まあ、伝説なんてそんなものだろ？とにかく、その式とい

うものは私たちにも扱えるものですか？」

「式が見えるのならば簡単だ、後は契約すればいいだけだからな」「そんなの『ごめんです！』

「声をそろえるな」

「ここは私だけです！！・・・ もやあつ」

急に水が降ってきて綾が声を上げる。なるほど、と小さく葉月が呟いた。あれが式の力なのね。

「見えない人間にはホントに怪奇現象だな。見える奴にとっちゃ幽霊の仕業らしいけど。な、葉月」

「だね。修行か、何をするのかしら」

「滝に打たれるとかな～？これから楽しくなりそうだな」「ちょっと待つてください。なんか今耳がおかしくなったんですけど。・・・ 水が耳にでも入つたってことは・・・」

『気のせいだわ』

「イヤー！」

朝の清々しい空氣の中に綾の声が消える。つん、まあ当然綾の意向が通るはずは無く。

ひつして屋上に新しい仲間が一人増えたんだよな。

\* \* \*

ああ・・・ 嫌だつて・・・ イヤだつて言つたのにいへー！！

どーして私つてこうなんでしょう？なんかすゞくすゞく御鏡先輩に弱くないですか？？分かつて押し付けるなんてサイテーですよお。

「ただいま

誰もいない家に言づ。これはもう、習慣のよつなもので。歪んでくだけだってのは知つてゐんですけど。

「「」ですよー。ホントにもう、冗談じゃないですよー」

幽靈にとり付かれてる変な人だと思ってたら、なんですか？異世界の人ってビーグーことですか！？

ああもうしかも幽靈が見たいってビーブルーとなんですか！！  
「ああも「さ」いつて・・・」

ド「ツ

「いったーい。ああもう家に来たんですから消滅してください」「物をぶつけてきた幽靈に哀願する。この幽靈は、名前で呼ばないと怒るし男の人のことを蔑ろにすると怒るし、総じて沸点低いし。なんかもう、「」まで尊大だと怖がってる暇とかない感じになってしまいます。

神の名も全然効かないし、私にできるのって言「」ときくだけなのかもしないんですけど・・・考えてたら切なくなつてきました。相模さんを押し込めるのはどの部屋にしましよう？と、日本人感覚では無駄に広い3LDKの家を見わたします。いつでも追い出せるように玄関の横の部屋かな？

客用のベッドに布団を置き、軽く掃除をする。大抵休日に掃除しているからそんなに汚れてないんですけど、気持ちの問題つていうか、そこで喚いている幽靈の問題つていうか。

一人暮らしだからいいものの、お一人は私には家族が居ると思っているはずなのにどういう常識なんでしょう。・・・家族が一緒だつたら何が何でも首を縊に振らなかつただろうつていうのはともかく。これで相模さんがここに居る準備ができちやつたのです。

異世界の人、らしいのにね。

昨日見た光景を思い出しながら笑う。焦げた大地。突き出ている氷の柱と、そこに引っかかっている焼けた何か。

それが引っかかっている所だけ氷が溶けかけていて目が離せなくて。

あんなことをする人は人とはいわないんですよ。少なくとも、私の周りの人にはいらない。普通でいたいんです。

必死で逃げ出したけど、目に焼きついてるんです。あの腕が異世界の人の最期なんぢやないですか？そして異世界の人に関わった私たちの・・・

でも言えないのです。御鏡先輩が望むから。

本当の本当に御鏡先輩が望むなら、私は止められないんです。なんかね、こうホントの御鏡先輩だーって時はドキッとするんですよ。強くてかっこよくて危なくて優しくて綺麗なんです。そうゆうときは何言つていいいのかわからなくて、もう頷くしかないのです。これからのことつてすごく考えたくないんですけど、でも、御鏡先輩が決めたのならそれでいいかなーって。・・・私つてホント駄目かも。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4597y/>

---

俺ら

2011年11月13日03時18分発行